

フェニキア都市ティールの大型墓

—レバノンのユネスコ世界遺産アルバスサイト南東部の発掘調査(2023年)—

前野 弘志 広島大学大学院人間社会科学研究科教授
 小川 拓郎 九州大学人間環境学研究院
 佐藤 育子 日本女子大学文学部研究員
 妹尾 裕介 琵琶湖博物館研究部学芸員
 辻村 純代 公財)古代学協会客員研究員
 藤本 悠 芸術文化観光専門職大学准教授
 堀 賀貴 九州大学人間環境学研究院教授

A Mausoleum in the Phoenician City of Tyre: Excavation at the Southeastern Part of Al-Bass Site, a UNESCO World Heritage Site in Lebanon (2023)

MAENO, Hiroshi Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University
 OGAWA, Takuro Assistant Professor, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
 SATO, Ikuko Research Fellow, Faculty of Humanities
 SENOO, Yusuke Curator, Research Staff, Lake Biwa Museum
 TSUJIMURA, Sumiyo Visiting Researcher, The Paleological Association of Japan
 FUJIMOTO, Yu Associate Professor, Faculty of Arts and Tourism, Professional College of Arts and Tourism
 HORI, Yoshiki Professor, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

前野
弘志
小川
拓郎
ほか

1. はじめに

本研究は、科研基盤研究(B)(一般)「レバノン南部の都市ティールにおけるアルバスサイトの発掘調査」(2023~25年度、課題番号23H00685)の採択を受けた前野弘志(碑文学)を代表とする日本隊と、レバノン南部地域遺跡監督官かつティール市世界遺産監督官のAli Badawi(考古学)を代表とするレバノン隊との国際共同研究である。ティール(現地名スール、フェニキア名ツール、ギリシア名テュロス、ローマ名テュルス)には(図1)、1984年にユネスコ世界遺産に登録されたアルバスサイトがある。本研究の対象である大型墓は、アルバスサイト内の南東部、観光客が足を踏み入れることのない藪の奥の窪地にある(図2)。前野が2022年9月に初めて現地を訪れた際、窪地は近隣住民のゴミ捨て場となっていた。低い塚があり、その上に2本のドラムが並んで立っていたので、それが遺構であることは一目瞭然であった。目を引いたのはドラムの色で、1本は赤色もう1本は青色であった。Badawiによれば、この遺構の存在は1980年代初頭から知られており、盗掘された可能性があるとのこと。2022年度は前野とBadawiが清掃と遺構周辺および

西崖の試掘を行った後に埋め戻し、翌年以降の本格的調査に備えた。

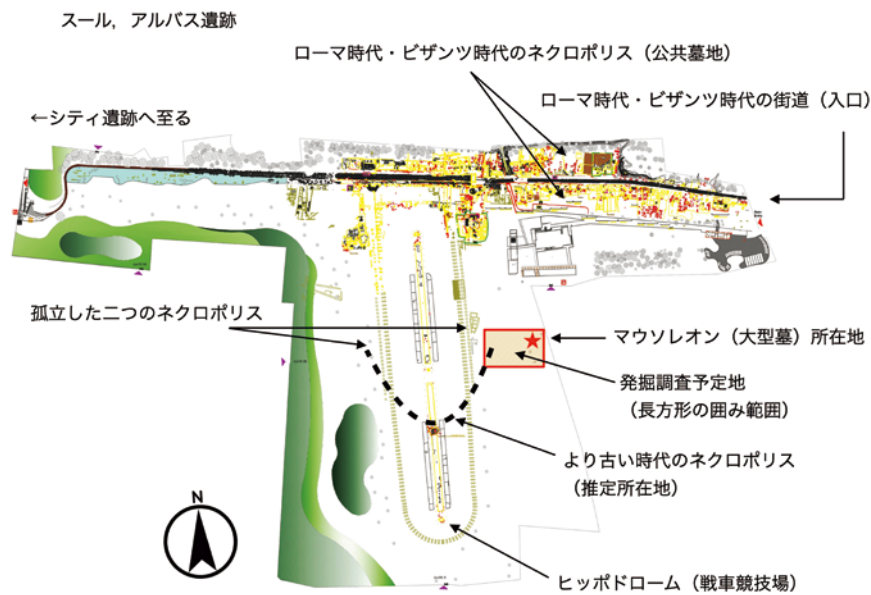
2. 発掘調査の概要(2023年9月4日~23日)

(1)上部構造

東西5.85m×南北4.81m、白色のモルタル床が敷



図1 ティールの位置



註: Ali Badawiの作図に前野が加筆

図2 大型墓の位置

かれ、あちこちに群青色のガラス片が埋め込まれている。縁には、おそらく東西辺にそれぞれ4本、南北辺にそれぞれ3本、都合10本の柱が建てられていた。ドラムは発掘された13本、1980年代初頭にBadawiが収蔵庫に収めた4本、現位置に立っている2本、都合19本あることから、1本の柱は2本のドラムで構成されていたと考えられる。ドラムの色は赤色・青色のみならず白色・橙色もあり、白色の12面に面取りされたものもある。これら低い柱の間に腰壁が建て巡らされ、両面に植物文が描かれている。屋根や梁などの石材は一つも発見されていない。モルタル床に登る階段も発見されていない(図3)。

(2) 本体

地面からモルタル床までの高さは約2.4m。東壁には、花綱のフレスコ画が描かれている。南壁には、花綱、先が尖った植物の葉、赤色の花のフレスコ画が描かれている(図4)。今でも遺跡周辺に見られる夾竹桃ではないかと推測される。南壁のフレスコ画の下地には明らかに別のフレスコ画の存在が認められ、修復ないし再利用の痕跡を示す。西壁には、フレスコ画がなく、他の壁と比して異質である(後述)。北壁には、5基の納体室が開口しており、向かって右から順にL1~5と命名した。本来は他の壁面と同様、外壁で覆われていたが、盗掘の際に剥がされた。納体室の屋



図3 モルタル床・ドラム2本

根は2枚の石板を斜めに組み合わせた三角構造であり、角度も工法も不統一である(図5)。

(3) 基壇

本体は、上部が斜めに面取りされた高さ約60cmの基壇上に載っている(図4)。

(4) 祭壇

北壁の前に、北に伸びる幅約2mのモルタル通路、その上に祭壇、西側に降る階段が発見された。モルタル通路は大型墓の西寄りに位置し、北壁に対してやや東斜めに接する(図5)。

(5) 隔壁

後代に増築されたものと見られ、小型の雑な切石の



図4 南壁(フレスコ画・基壇・隔壁)



図5 北壁(納体室・モルタル通路・祭壇)



図6 ティール周辺のコンター図

隔壁が、南東隅から東に、南西隅から西に、北東隅から北に伸びる(図3)。1984年に大型墓を北から南に向かって撮影した古写真を見ると、大型墓の南奥、窪地に降る斜面に、同様の切石で作られた階段と壁が写っている。

3. リモートセンシング

AW3D 高精細版地形データのDTMを用いてティール周辺の地形解析を行った。米国 Maxar 社の衛星画像を用いた0.5~2.0mの高精細標高モデルであり、0.5m解像度のDTM(Digital Terrain Model)を用いて、ティール周辺の微地形の全容が明らかとなった。地形解析ではDTMから構築したDEM(Digital Elevation Model)とこのDEMを元に作成した傾斜度面のデータを合成レンダリングし、標高と地形起伏を把握しやすいように可視化した。特徴的であったのは半島中央部の丘陵部分が明瞭に表現されている点、アルバスサイト周辺の地形の全容が見えてきた点である。アルバスサイトは北部に東西方向に標高が低いエリアがあり、その中央部から南北に伸びる窪地が存在して

いることが分かった(図6)。この範囲内において標高がやや高い場所には地下に埋没遺構が存在している可能性がある。Quick Bird 衛星のマルチスペクトル画像も入手済みであるため、今後は植生指標(NDVI)なども使用して土壌状態も検討したい。

4. レーザー実測調査

(1)3D データの作成

大型墓と戦車競技場を対象に計115箇所ではレーザー実測した点群データ(作業日2023年9月18~22日)から、連続した3Dデータを作成した。RTK測位によってヨーギル博士によって取得された5点のGNSS座標(作業日2023年9月21日)に対して作成した3Dデータの位置合わせを行った。その結果、2023年度の発掘時点で判明している大型墓の最も低い位置の高さが1.5405m、戦車競技場の地盤の高さが3.1913mであることが分かった(図7)。

(2)出土した石材の実測

大型墓の周囲から出土した石材をおよそ20cm間隔ごとに斜面に並べ、6箇所からレーザー実測を行った。次に、各石材の3Dデータを作成し、石材の断面形に従って、長方形、三角形、台形、コーニス、判別不可の五つの項目に分類した。北面から出土した石材は計87点、東面から出土した石材は計84点、西面から出土した石材は計105点、出土不明の石材は計24点であった。

(3)大型墓各立面に欠如した石材の算出

各立面に欠如していると思われる石材の数を算出し、出土した石材の数と比較した。立面は、例外を除くと、三つの石材を1組として、南北面の段は8組、東西面の段は7組で構成され、おおよそ南北面は120点、東西面は105点の石材が使用されていると想定してよい。



図7 大型墓と戦車競技場の断面図



図8 アンフォラ・スタンプ

この想定をもとに各壁面に欠如している石材を算出すると、北面 89 点、東面 19 点、西面 37 点、南面 16 点となる。ただし、北面で 31 点、西面で 4 点、それぞれ近代に積み直されたと考えられる石材が確認されるため、これらで欠如する石材の点数を補うと、北面 47 点、東面 19 点、南面 16 点、西面 33 点、総計 115 点となる。一方で、大型墓周辺で出土した長方形石材は北面 64 点、東面 55 点、南面 0 点、西面 69 点、総計 195 点であり、欠如すると想定される石材数を 80 点上回る。これら上回った数の石材は大型墓上面の腰壁に使用された可能性もあるため、長方形断面をもつ石材から、腰壁を区別する必要がある。あるいは、近現代に新たな石材が大型墓の立面の復元に使用された可能性が指摘される。

5. 出土文字史料

(1) アンフォラ・スタンプ

大型墓の西側から出土したアンフォラの取手上面に、縦 1.3 cm × 横 2.9 cm のスタンプが押され、印面の左半分にギリシア文字で EYE と読める(図 8)。おそらくこのアンフォラを作った陶工の名前の最初の 3 文字の合字と考えられる。アンフォラの産地は明確でないが、一般にアンフォラ・スタンプ使用のピークは古典期末からヘレニズム時代にかけてであり、それ以降のものはほとんどないとされる(Badoud 2017: § 2, § 6)。

(2) コイン 2 枚

いずれも大型墓の北西隅の土中で、骨片および群青色のガラス片とともに発見された。おそらく北壁に開



図9 コイン

口する最も西側の納体室 L1 から、盗掘された際にこぼれ落ちたものと思われる。いずれも「テュケー／ガレー船」タイプの青銅貨で、裏面にはギリシア語で [ΙΕΡΑΣ ΚΑΙ] ΑΣΥ[ΛΟΥ]「神聖かつ不可侵の」とフェニキア語で 𐤕𐤓𐤕𐤕「ツールの」と読める(図 9)。このタイプの発行期間は前 98/7 年から後 84/5 年までであり(BMC, Phoenicia, p.255-256)、テュロスの自治独立期に当たる。裏面上部に発行年の一部が認められるが、今のところ判読には至っていない。

6. ランプ

大型墓の南壁東側に取り付く隔壁北面に埋め込まれた形で出土した。その意図は不明だが、形が残ったまま埋められていたため、単なる壁を構成する混和材ではないと考えられる。色調は胎土がにぶい橙色を呈し、赤スリップがかかる。注油孔の直径は 17 mm。ノズル部は欠損しており全体の形は不明である。体部はやや下方に歪みを持った円形をなすが、ノズルを下にみて左下方がわずかに突き出ている(図 10)。ヘレニズム期に特徴的な delphiniform 型(Bailey 1975-96)の器形に似る。ただし典型的な delphiniform 型と比べて形が崩れており、本来の形態的な意味(抽象化したイルカ形)は失われている。したがって、本ランプがヘレニズム期まで遡る可能性は低いと考える。体部上面には浮き彫りで葉と種実を組み合わせで連続させた植物文が左右対象に施される。遺存状態が悪く文様は不明瞭ではあるが、アルバスサイトのアポロン神殿から出土した 1 世紀後半のランプ(Marchand 1996)に似る。



図10 ランプ

器形的にやや古い要素を残すが、文様のあり方から少なくとも1世紀に帰属でき、1世紀後半の可能性が示唆される。

7. 今後の課題

①大型墓の履歴。②納体室の人骨調査。③大型墓周辺で大量に発見され、モルタル床下にも埋め込まれている環状取手アンフォラの編年。④同型大型墓の地中海的分布。カルタゴのビュルサの丘ネクロポリスに類似する納体室が確認される。⑤アルバスサイト内にあるコルンバリアとの比較。⑥隣接する戦車競技場との関係。⑦フレスコ画の美術史的考察。⑧水脈との関係など。

■参考文献

- ・ Badoud, Nathan 2017 "Deciphering Greek Amphora Stamps," in: *The Center for Hellenic Studies Research Bulletin*, vol.5/2. (http://nrs.harvard.edu/urn-3:hnc.essay:BadoudN.Deciphering_Greek_Amphora_Stamps.2017) (最終閲覧日 2023 年 11 月 30 日).
- ・ Bailey, D. M. 1975-96 *A Catalogue of Lamps in the British Museum*, British Museum, Cambridge.
- ・ BMC Phoenicia = G. F. Hill, *A Catalogue of the Greek Coins in the British Museum, Catalogue of the Greek Coins of Phoenicia*, London, [1910].
- ・ Marchand, Jeannie 1996 *The Lamps, Tyre: The Shrine of Apollo*, Amman, Jordan, pp.57-67.